

文藝春秋

大正十二年一月三十日第三種郵便物認可
平成三十一年一月一日発行(毎月一回一日発行)
第九十七巻第一号(十二月七日発売)

特集 平成30年史 全証言 小沢一郎 貴乃花光司
日産ゴーン追放全真相/シリア幽閉記 安田純平 新年特別号



將軍の世紀

やまうちまさゆき
山内昌之

武蔵野大学特任教授・
東京大学名誉教授

「第十三回」二代目の孤独

苛烈な大名統制にキリスト教弾圧。
秀忠の非情な決断や発想の裏には何があったのか。



(上)キリシタン信仰に寛大だった福島正則
(下)「脅威」として恐れられた伊達政宗

一、カトリック教徒の見た徳川秀忠

「苦悩するキリシタン宗団にとって、この世には安心と平和を期待できるような希望はひとつしか残っていないかった。つまり、日本に騒動と戦争が起ることである。そうすれば君主国は敗れて多くの主君に分割され、政權とすべての物を一人の君主から取り去ることができるよう。それにしても、その(ただ一人の)君主が彼(徳川秀忠)のようにキリストの教えの不倶戴天の敵であったならば、彼の家臣の他の国主や君主の誰も、いかに望んでも、破滅の恐れなく(キリストの教えの)友になつたり、友情を示すことができないのは止むを得ない。日本での武器と戦争を望むのは無理のないことだった」

〔D・バルトリ著『イエズス会史』抜粋(一六一七、一八年補遺)』「十六・七世紀イエズス会日本報告集」IIの2)。

戦国の戦乱を克服して平和と安定を構築したばかりの時期である。江戸時代に新たな内乱や内戦を期待するダニエツロ・バルトリ神父の発言には驚くほかない。しかし、イエズス会のローマ学院長だった人物の発言は、スペイン人による日本征服計画にも通じるところがある。実際に、天正九年(一五八一)から十八年までイエズス

会の日本準管区長(布教長)だったポルトガル人ガスパル・コエーリヨは豊臣秀吉の伴天連追放令を受けて、九州のキリシタン大名たちに秀吉への反乱を促した。ルソンのスペイン人に日本征服を画策させている。日本全土をカトリック化したあかつきには、日本人を尖兵として中国に攻め入る案を練っていたほどだ。カトリックによる日本征服の企ては「秀吉の思考の中の絵空事」だったとはいえない(岡美穂子「キリシタンと統一政權」『岩波講座日本歴史』近世1)。

イエズス会は、秀頼がキリシタンに好意を抱いていたと評価する。秀頼の陣中には、十字架や救世主や聖ヤコブの絵姿を描いた旗が六流ほど翻っていた。大坂城内には、イエズス会の司祭が二名、聖フランシスコ会の司祭が二名、聖アウグスティノ会の司祭が一名、長い間留まっていた。さらに二人の在俗司祭が家康の追放令から逃れた多数のキリシタンに秘蹟を与えるために城中にいたのである(「一六一五、一六年度・日本年報」『十六・七世紀イエズス会日本報告集』IIの2)。平戸のイギリス商館長リチャード・コックスは、イエズス会などの神父たちが、子どもを親に、臣下を君主に叛かせるように扇動して、不安定な事態すべての火付け役となり教唆者でもあるという噂に触れている(『日本関係海外史料 イギリス

商館長日記』原文編之上、一六一六年八月十八日条英文)。

豊臣勢力のなかにカトリック教徒が加わり、そこに大坂夏の陣で豊臣勢と戦わなかった松平忠輝らの不穏な目論見が連動すれば、家康・秀忠・家光の嫡系で徳川権力を永続化させる政策の一大脅威になりかねなかった。

將軍秀忠は、元和元年(一六一五)になつても、家康を「皇帝」と呼ぶ外国人らから「江戸の領主」と呼ばれたようだ。年寄の本多正信が大名に発給する書状は、丁寧な披露状の形式をとり、じかに大名へ宛てた薄礼の直状を出せない状態が続いた(福田千鶴「徳川秀忠」)。秀忠は、家康から継承した大名への軍事指揮権と領知宛行権を掌握した事実を示し、自らが名実ともに天下人たることを証明する必要があった。このために家康が果たせなかつた西国の外様大名への領知宛行(朱印)状を出すとともに、秀忠と次代將軍・家光の上洛に大名らを供奉させる軍役動員によつて武力と武威を誇示する必要がある。秀忠は、このために元和元年の一国一城令と武家諸法度第六条を厳格に運用したのである。「諸国の居城は修補を為すと雖も、必ず言上すべし、況んや新儀の構営は堅く停止せしむ事」。

それと不可分に、政權をめぐる権力闘争と内外のカトリック教徒による江戸幕府転覆の動きを切り離し、不穏